

准教授就任

病態内科学講座 呼吸器内科学

さとう みつお
佐藤 光夫

<略歴>

平成3年3月 名古屋大学医学部卒業
平成3年5月 名古屋掖済会病院研修医
平成8年7月 名鉄病院呼吸器内科
平成10年7月 名古屋大学医学部第一内科
平成12年9月 学位取得(博士(医学))(名古屋大学)
平成13年10月 市立四日市病院呼吸器内科医長
平成14年4月 テキサス大学サウスウエスタンメディカルセンター博士後研究員
平成19年4月 同上アシスタントプロフェッサー
平成19年10月 名古屋大学大学院医学研究科化学療法学特任講師
平成20年10月 国立長寿医療センター病院呼吸器内科医長
平成21年3月 名古屋大学大学院医学研究科呼吸器内科学特任助教
平成23年10月 名古屋大学大学院医学研究科呼吸器内科学講師
平成29年10月 名古屋大学大学院医学研究科呼吸器内科学准教授

<業績>

1. Kakumu T, Sato M, Goto D, Kato T, Yogo N et. al: Identification of proteasomal catalytic subunit PSMA6 as a therapeutic target for lung cancer. Cancer Sci 2017;108: 732-743
2. Sato M, Larsen JE, Lee W, Sun H, Shames DS, Dalvi MP, Ramirez RD, Tang H, DiMaio JM, Gao B, Xie Y, Wistuba, II, Gazdar AF, Shay JW, Minna JD: Human lung epithelial cells progressed to malignancy through specific oncogenic manipulations. Mol Cancer Res 2013; 11: 638-650
3. Elshazley M, Sato M, Hase T, Yamashita R, Yoshida K et. al: The circadian clock gene BMAL1 is a novel therapeutic target for malignant pleural mesothelioma. Int J Cancer 2012; 131: 2820-31
4. Sato M, Shames DS, Gazdar AF, Minna JD: A translational view of the molecular pathogenesis of lung cancer. J Thorac Oncol 2007; 2: 327-343
5. Sato M, Vaughan MB, Girard L, Peyton M, Lee W, Shames DS, Ramirez RD, Sunaga N, Gazdar AF, Shay JW, Minna JD: Multiple oncogenic changes (K-RAS(V12), p53 knockdown, mutant EGFRs, p16 bypass, telomerase) are not sufficient to confer a full malignant phenotype on human bronchial epithelial cells. Cancer Res 2006; 66: 2116-2128

学友会の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、平成29年10月1日付けを持ちまして名古屋大学大学院医学系研究科病態内科学講座呼吸器内科学分野の准教授を拜命致しました。謹んでここにご挨拶申し上げます。

私は名古屋大学医学部を卒業時、自身の進路として内科系を第一に考え、また、救急対応のできる医師になりたいと考えました。そこで、第一線の第三次救急病院であり、かつ、内科のすべての専門診療科を持つ名古屋掖済会病院を研修病院に選びました。掖済会病院では、山本雅史先生(現副院長)始め、川端厚先生(現トヨタ記念病院・感染症科科部長)、八木哲也先生(現感染制御部教授)から呼吸器内科の基礎をご指導頂きました。また、多くのよき仲間恵まれ、今から振り返っても忙しいながらも思い出深い時期でした。研修医として複数の内科専門領域をローテーションする中で、呼吸器内科、とくに肺癌の治療に興味を持ち、山本先生にお願いし、第一内科第6研究室(呼吸器内科学分野)のチーフをされていた下方薫先生(名古屋大学名誉教授)に入局の意思をお伝えし、入局しました。その後、卒後6年目に名鉄病院に異動しました。名鉄病院では別の視点から疾患を分析することを学びました。村手孝直先生(現千秋病院内科部長)のご指導のもと、思う存分臨床医として働くことができました。

卒後8年目に名古屋大学第一内科に帰局しました。当時、第6研究室のチーフをされていた長谷川好規先生(現呼吸器内科学教授)から関戸好孝先生(現愛知県がんセンター研究所副所長)のもとで肺癌の分子生物学の研究をしてはとご提案頂き、関戸先生にご指導願うことを決心しました。齋藤英彦先生(名古屋大学名誉教授)、関戸先生のご指導のもと、博士号を取得。その後、堀尾芳剛先生(現愛知県がんセンター中央病院部長)に研究を指導頂く中で、さらに、研究を深めたいと考えました。そこで、関戸先生が留学されたテキサス大学サウスウエスタンメディカルセンターのJohn Minna先生の研究室への紹介を懇願し、夢が叶いました。留学前に市立四日市病院に半年間赴任の後、2002年春に渡米しました。市立四日市病院は、大変忙しい病院でしたが、部長の池田拓也先生は留学前の私の事情をよくご理解頂き、忙しい中にも多くを学びました。

留学先のMinna先生は肺癌の分子生物学研究の先駆者であり、多数の肺癌細胞株樹立の功績が有名です。留学した当時は、肺癌細胞のゲノムDNAの増幅領域もしくは欠失領域から、癌遺伝子もしくは腫瘍抑制遺伝子候補を探し、いわゆるクローニングの時代からそれらの候補遺伝子の機能を探求する時代に大きく転換していました。このような背景から、Dr. Minnaラボは肺癌の発生や進展に関与が推測される遺伝子の生物学的な機能を評価する実験系の確立を研究室の主たるテーマとしていました。私はこの研究を担当し、同研究室が樹立した不死化気管支上皮細胞(HBEC)からの肺癌の発癌過程の実験的な再現に成功しました。HBEC実験系は現在でも世界で利用され私の共著論文を含めNatureなど30報以上の一流誌論文で使用されています。この功績が認められアシスタントプロフェッサーへ昇格しました。

2007年に、安藤雄一先生(現化学療法部教授)のお誘いにより名古屋大学化学療法部の特任講師として帰国することができました。同部では臓器横断的な薬物治療学を学び、この経験は現在の私の肺癌治療の基礎となっています。その後、長寿医療センター病院に呼吸器内科医長として赴任しました。終末期医療の在り方を真剣に考えておられる中島一光先生(いきいき在宅クリニック院長)との出会いとご指導を通じて、私も同テーマについて考えを深めることができました。

2009年に名古屋大学附属病院呼吸器内科にGCOE特任助教として赴任しました。博士課程大学院生の学位論文の指導を中心に研究を継続してきました。中でも異文化を背景に持つエジプトからの留学生の指導は、苦労もありましたが、私自身も国際人として成長することができました。最近では、プールshRNAによる機能的スクリーニングとHBECを活用し、新たな肺癌治療の開発に取り組んでいます。薬物開発の足掛かりとなる発見も得つつあり、今後、さらに研究を続けていきたいと思っております。

以上のように、医師としての私のこれまでの人生は、多くの諸先生方から多大なるご指導と同僚からの励ましを頂いた幸せなものであったと感じます。特に、長谷川好規教授にはこれまで多くの事に自由に挑戦させて頂きました。皆様からのご恩に答えるためにも、診療、教育、研究に一層邁進していく所存でございます。学友会の皆様、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。

人事トピックス

腎不全システム治療学寄附講座 教授

みずの まさし
水野 正司

〈略歴〉

1989年3月 弘前大学医学部卒業
 1989年6月 労働社会事業団 中部労災病院勤務
 1994年4月 名古屋大学医学部第三内科 医員
 1998年6月 同 助手
 2001年10月 University of Wales College of Medicine, Medical Biochemistry, Visiting Scholar
 2004年1月 School of Medicine, Cardiff University, Medical Biochemistry & Immunology, Post doctoral research fellow
 2005年5月 名古屋大学大学院医学系研究科 腎不全治療システム学寄附講座 助教
 2010年2月 同 腎不全総合治療学寄附講座 講師
 2015年2月 同 腎不全システム治療学寄附講座 准教授
 2017年7月 同 教授
 現在に至る

〈業績〉

1. Mizuno M., Nishikawa K., Goodfellow R.M., Piddlesden S.J., Morgan B.P., Matsuo S.: The effects of functional suppression of a membrane-bound complement regulatory protein, CD59, in the synovial tissue in rats. *Arthritis Rheum.* 40: 527-533, 1997.
2. Mizuno M., Nishikawa K., Okada N., Matsuo S., Okada H., Ito K., Okada H.: Inhibition of a membrane complement regulatory protein induces lethal shock in rats primed with trace levels of lipopolysaccharide. *J. Immunol.* 162: 5477-5482, 1999.
3. Mizuno M., Nishikawa K., Spiller O.B., Morgan B.P., Okada N., Okada H., Matsuo S.: Membrane complement regulators protect against the development of type II collagen-induced arthritis (CIA) in rats. *Arthritis Rheum.* 44:2425-2434, 2001.
4. Mizuno M., Harris C.L., Johnson P.M., Morgan B.P.: Rat membrane cofactor protein (MCP; CD46) is expressed only in the acrosome of developing and mature spermatozoa and mediates binding to immobilized activated C3. *Biol Reprod* 71: 1374-1383, 2004.
5. Mizuno M., Blanchin S., Gasque P., Nishikawa K., Matsuo S.: High levels of complement C3a receptor in the glomeruli of inflamed human lupus nephritis. *Am. J. Kidney Dis.* 49:598-606, 2007.
6. Mizuno M., Nozaki M., Morine N., Suzuki N., Nishikawa K., Morgan B.P., Matsuo S.: A protein toxin from the sea anemone *Phyllodiscus semoni* targets the kidney and causes a renal injury resembling haemolytic uremic syndrome. *Am. J. Pathol.* 171:402-414, 2007.
7. Mizuno M., Ito Y., Mizuno T., Suzuki Y., Harris C.L., Okada N., Matsuo S., Morgan B.P. Membrane complement regulators protect against fibrin exudation in a severe peritoneal inflammation model in rats. *Am J Physiol Renal Physiol* 302:F1245-F1251, 2012.
8. Mizuno M., Suzuki Y., Higashide K., Sei Y., Iguchi D., Sakata F., Horie M., Maruyama S., Matsuo S., Morgan B.P., Ito Y. High level of soluble C5b-9 complex in dialysis fluid is a predictor of poor prognosis in peritonitis in peritoneal dialysis patients. *PLoSOne* 12:e0169111, 2017.

学友会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

2017年7月1日付で、腎不全システム治療学寄附講座教授を拝命いたしました。この場をお借りして謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成元年に弘前大学医学部を卒業した後、中部労災病院で研修を行い腎臓内科医として研鑽を積んだ後、名古屋大学にて松尾清一前腎臓内科教授（現名大総長）、西川和裕先生（現愛知医大教授）のご指導のもと、補体系における膜補体制御

因子（CReg）の役割を解明する研究を行いました。更に補体研究を極めるため、2001年より4年半UKに留学し、ラットのCRegの一つであるCD46を世界ではじめて蛋白レベルで同定し、分子の分布と機能の解明を行いました。また、留学前より続けていた海洋生物毒により受けるCReg傷害とこれに伴う腎障害や、ループス腎炎におけるC3aレセプターの発現などを検討しました。この様に、生体における補体学全体に興味をもって研究を続けてきました。

2005年に帰国後は、名古屋大学にて、腎不全治療システム学寄附講座（現腎不全システム治療学寄附講座）で仕事を行う機会を頂き、伊藤恭彦先生（前寄附講座教授、現愛知医科大学腎臓・リウマチ膠原病内科教授）の御指導のもと、腹膜透析（PD）に関する臨床や研究、教育活動に積極的に活動してまいりました。そして、この7月より教授を拝命いたしました。

本講座は、2004年に当時の松尾清一先生のご尽力により、腎不全治療システム学寄附講座として伊藤先生を講座の長として開設されました。透析患者が日本全体で32万人を超える中、諸外国と比べ日本の腎不全治療は血液透析に極端に偏っている現状があり、本寄附講座は、血液透析、PD、そして腎移植のそれぞれの腎代替療法の利点を生かした、総合的な腎不全医療システムの構築と普及を目的として設立されました。とりわけ、本邦でこれまで十分に普及していなかったPD療法を発展させることを目的に、伊藤恭彦前教授を中心に名大病院にPD療法を導入し、院内のみならず東海地区を中心とした院外にも教育・啓蒙活動を行ってきました。2010年からは講座名称を腎不全総合治療学寄附講座とし、さらに全国の医師・看護師への教育活動として、Baxter Scientia Japan at Nagoya University (BSJNU)を立ち上げ、これまで2,200名を超える受講者を受け入れてきました。また、研究活動としては、臨床研究から基礎研究まで幅広く行い、PD長期継続を妨げる腹膜傷害の機序の解明と予防、治療を目標に研究を継続してきました。2015年からは名称を現講座名へとあらためて現在に至っております。

その中で私は、日本におけるPD治療の現状と問題点を明らかにするために、東海地区PDレジストリを関連病院と共に構築し、その成果を報告しました。また、基礎研究では、腹膜傷害から長期PDの致死合併症である被嚢性腹膜硬化症へと進展する機序の解明とその克服を目指し、これまでの研究実績を生かして補体学の観点からアプローチし、世界に先駆けて腹膜障害と補体系が関連していることを報告しております。

超高齢化社会を迎える本邦において、腎不全患者の高齢化も顕著となっており、在宅医療に位置づけられるPDがますます重要になっていくと考えられます。今後は、本寄附講座のポリシーを受け継ぎ、引き続きPD療法の普及、発展に貢献していく所存です。また、PDに関する研究に加えて、腎臓病学の分野で新たな補体関連疾患と判明しているC3腎症について、国内全体で症例登録事業を構築し、病態の解明と治療の開発に従事し、社会に貢献したいと考えています。

これからも引き続き、臨床、研究、教育の分野から、名古屋大学の発展に貢献できるよう努めていきたいと存じます。名古屋大学学友会の諸先生方には今後とも益々のご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

人事トピックス

藤田保健衛生大学 医学部 ウイルス・寄生虫学講座 教授

むら た たかゆき
村田 貴之

〈略歴〉

- 1998年3月 東京大学農学部獣医学科卒業
2002年3月 名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了
2002年4月 京都大学ウイルス研究所博士研究員
2006年4月 カナダ McGill 大学生化学部門博士研究員
2007年7月 愛知県がんセンター研究所腫瘍ウイルス学部研究員
2013年5月 名古屋大学大学院医学系研究科ウイルス学准教授
2017年9月 藤田保健衛生大学医学部ウイルス・寄生虫学教授

〈業績〉

1. Masud HMAA, Watanabe T, Yoshida M, Sato Y, ..., Murata T. Epstein-Barr Virus BKRF4 Gene Product Is Required for Efficient Progeny Production. J Virol. in press.
2. Murata T, Noda C, Narita Y, Watanabe T, Yoshida M et al. Induction of Epstein-Barr Virus Oncoprotein LMP1 by Transcription Factors AP-2 and Early B Cell Factor. J Virol. 2016 90(8):3873-89.
3. Watanabe T, Narita Y, Yoshida M, Sato Y, ..., Murata T. The Epstein-Barr Virus BDLF4 Gene Is Required for Efficient Expression of Viral Late Lytic Genes. J Virol. 2015 89(19):10120-4.
4. Murata T, Narita Y, Sugimoto A, Kawashima D, Kanda T et al. Contribution of myocyte enhancer factor 2 family transcription factors to BZLF1 expression in Epstein-Barr virus reactivation from latency. J Virol. 2013 87(18):10148-62
5. Murata T, Kondo Y, Sugimoto A, Kawashima D, Saito S et al. Epigenetic histone modification of Epstein-Barr virus BZLF1 promoter during latency and reactivation in Raji cells. J Virol. 2012 86(9):4752-61.

この度2017年9月21日より藤田保健衛生大学医学部ウイルス・寄生虫学講座の教授を拝命致しました。この場をお借りして名古屋大学学友会の皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

ご存知のように藤田保健衛生大学は名古屋近郊の豊明市に位置し、日本屈指の大学病院を有する医学系大学です。創設者藤田啓介博士による「独創一理」の理念は今も引き継がれ、研究にも力を入れています。Times Higher Educationの世界大学ランキングでも日本の私立大学で最高位にランクされており、特に論文の引用数(Citations)の項目では、1位のマサチューセッツ工科大学(MIT)を100とした時の指標が藤田保健衛生大学は74.5で、東京大学の63.7を大きく引き離して日本一に輝いています。教育に関しても「アセンブリ」など独自のシステムによって高度なチームワークを涵養し「良き医療人」の育成を目指しているほか、教職員も

ワークショップ等を通してざっくばらんにディスカッションする、風通しの良い校風があると感じます。

私は1999年より名古屋大学医学部病態制御研究施設ウイルス感染部門の西山幸廣教授のご指導の下、ヒト単純ヘルペスウイルスの研究を始めました。当時取り組んだウイルス遺伝子の同定と機能解析という命題は、対象とするウイルスが変わった現在でも私の研究の柱のひとつであります。その後京都大学ウイルス研究所、McGill大学生化学部門で、ポスドクとして研鑽を積み、2007年には愛知県がんセンター研究所腫瘍ウイルス学部の鶴見達也部長の下でEpstein-Barr (EB) ウイルスの研究に着手しました。がんセンターでは大腸菌内遺伝子組換えの手法による組換えEBウイルス作製法を確立したほか、cDNAライブラリや薬剤ライブラリを用いたスクリーニングにも取り組みました。

2013年に名古屋大学医学系研究科ウイルス学講座の准教授として赴任し、引き続きEBウイルスの研究を継続して参りました。がんセンターの鶴見先生はEBウイルスの基礎的研究で優れた業績を挙げられましたが2014年にご退官され、大変ありがたいことに鶴見先生が築き上げられた全ての材料、技術を私に譲渡下さいました。お陰で名古屋大学に異動してもアクティビティを落とすことなくスムーズに研究を開始することができました。名古屋大学の木村宏教授は小児科のご出身で、それまで基礎研究一辺倒だった私には大きく欠けていた、臨床的な観点を教えて頂きました。木村先生を通して小児科等の先生方とも繋がりができましたし、木村先生の慢性活動性EBV感染症等のご研究にご一緒できましたことは大変よい経験になっております。非常にお心の広い先生で私のマニアックな研究にもご理解を賜り、また優秀な学生にも恵まれ、名古屋大学では多くの成果を挙げることができました。

こうして振り返ってみますと、私は多くの先生方、特に名古屋大学関係の先生方に支えられてきたのだということがよく分かります。今後とも、名古屋大学、学友会の先生方と様々な観点から連携、交流を深めさせて頂きましたら幸いです。ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。